

図書館だより

Library News No.65
Nara National College of Technology

2008年2月 奈良工業高等専門学校図書館発行



絵：3I 中川 雄貴

目 次

巻頭言“真”と“偽”	2
平成 19 年度読書感想文コンクールを終えて	3
入賞作品紹介	5
学生会図書委員によるブックガイド	11

2007年を表す漢字が“偽”であったのは実に嘆かわしい。我々は“偽”のあふれる中、“真”が何であるかを見抜かなければならない。しかし、ややもするとその“偽”は住处を見つけて居続ける。現在、我々はインターネットの急速な普及とともに膨大な情報の中で過ごしている。そして、ユビキタス社会の到来は目前に迫っている。もちろんこれは素晴らしいことであり、いまやコンピュータ無しではやっていけない。ウィキペディアは百科事典に取って代わり20冊にもおよぶ平凡社大百科事典はもうとっくに過去のものになってしまった。しかし、インターネットから得られる情報はすべてが“真”であろうか？

今朝ニュースを見ていると大統領候補を決めるニューハンプシャー州民主党予備選で、前評判が高かったヒラリー・クリントン上院議員が、バラク・オバマ上院議員を相手に苦戦していると伝えられていた。その前のアイオワ州ではすでにオバマ氏が勝利している。その情勢の急激な変化のきっかけは、若者層によるインターネットを利用した支持の呼びかけとも伝えられていた。今日、素早い情報伝達がいかに大きな影響を与えるかの例である。私を含め化学を研究するものにとってもインターネットを経由したデータベースの利用環境（もちろん登録料は必要であるが）は、研究のスタイルを一変した。合成しようとしている化合物が新規であるかどうかは、SciFinderというデータベースですぐわかる。また、求めるものが新規化合物であってもその原料となる化合物はほとんどの場合報告されており、その文献に記載されている方法にしたがって合成すれば目的の新規化合物への道は圧倒的に近くなる。すなわち、情報がどれだけ早く得られるかが研究の鍵になってきているのである。しかし、どんなにインターネットが普及しても主役が我々であることを忘れてはならない。すなわち、我々が学ばな

ければ、“偽”の中に落ち込んでしまう。

昨年“パソコンで見る動く分子事典”という新書（ブルーボックス）が講談社から出版された。DVDが付属されていて化学を専門としない方々にも分子の面白さが伝わりお薦めである。コンピュータハードをはじめ、家庭用電気製品、洗剤、薬、化粧品などの生活用品すべてが化学物質でできている。これらがどのような物質（分子）からできているかを視覚的に紹介しているのが上記の新書である。今まで化学を専攻する人以外は構成分子を考えることなどしなかったのではなかろうか。この機会に全く違った観点からものを見てみるのも良いと思う。話を最初の“真”という話にもどそう。もう10年以上前の出版になるが、動物行動学を研究していた竹内久美子氏が書き話題をよんだ「そんなバカな！」と言うタイトルの本が文庫本で書店に並んでいる。内容はここで紹介するには過激なものも多いため触れないが、リチャード・ドーキンスの「利己的遺伝子論」の観点から人間の行動を面白おかしく論じている。これを信じるか信じないかは意見が分かれ、現在の専門家の間ではかなり否定的だ。すなわちトンデモ本として見る向きもある。竹内氏は京都大学理学研究科の著名な日高敏隆研究室の博士課程で学んでおられ動物行動学の専門家でもある。このように、専門家が好きなこと？を言うとその“真”は門外漢の私にはお手上げである。この例のように、真実はわからないけれど楽しくおかしく読み物ならいいじゃないかというものまでまさに多様である。我々は、何が重要でかつ真実かを判断しなければいけない社会に生きており、天文学的数の情報からいかに自分にとって重要で“真”の情報を抜き出すかが来るユビキタス社会への備えである。

平成 19 年度

読書感想文コンクールを終えて

情報メディア教育センター運営委員会

情報メディア教育センター運営委員会主催・第 3 2 回読書感想文コンクールの結果を発表します。応募総数は 356 編。その中から、情報メディア教育センター運営委員会委員 8 名と国語科教員 3 名の計 11 名の審査・投票の結果、次の最優秀作 1 編と優秀作 7 編が入選となりました。以下に、その氏名を記し榮譽をたたえます。

最優秀賞

物質化学工学科 1 年 田中 利奈 「レインレイン・ボウ」を読んで

優秀賞

電気工学科 2 年 瀧頭いづみ ただ、夜歩くだけのすばらしさ
——「夜のピクニック（奥田陸）」を読んで

電子制御工学科 2 年 井戸 悠太 犯した「罪」と下された「罰」

電子制御工学科 2 年 木崎 隆太 「運転士」を読んで

物質化学工学科 2 年 松岡 直人 「明日の記憶」

機械工学科 1 年 遠嶋 綸 「風林火山」

電子制御工学科 1 年 池田 篤史 「チビだった僕、デカかったプロ野球の夢」

情報工学科 1 年 山口 浩基 「泣き虫しよったんの奇跡」を読んで

また、以下の 26 名の諸君の作品が佳作として選ばれました。この中には、最終審査まで残って、わずか 1 ポイントの差で入選とはならなかった作品も多く含まれています。これらの諸君にも入選作に劣らない賞賛の辞を呈したいと思います。

佳作

3 I 岡田亜沙美	3 I 宮本 佳治	2 M 辻本 結花	2 M 橋下滉太郎
2 M 横村 亮	2 E 松川 亮輔	2 E 山田 秀磨	2 S 浦井 健次
2 S 藪田 和輝	2 I 北村有佳理	2 I 松下 貴徳	2 I 結崎 嵐稀
2 C 稲上 直斗	2 C 中山 公美	2 C 森岡 俊文	1 M 内宮 拓郎
1 M 吉井 謙介	1 E 浦岡 泰之	1 E 高田 良平	1 E 西村佳那子
1 S 荒瀬 侑幸	1 S 仲井 祐太	1 I 久保陽一郎	1 I 里中沙矢香
1 C 竹内 大貴	1 C 中川 孝基		

その他にも、力作が多くありました。応募した諸君には、情報メディア教育センター運営委員会と国語科を代表して、感謝の意を表する次第です。特に、作文は苦手で、入選なんて全く目標にもならないけれど、それでも頑張って本を読んで、頑張って文章を書ってくれた人には、国語科の一教員としては、本当に「ご苦労さん、ありがとう」と声を掛けたい気持ちです。

以下、恒例にしたがい入選作の幾つかについてコメントを付します。

まず、最優秀作となった1 C・田中利奈さんの作品ですが、ポイント制で、11名の審査員から15ポイントを獲得しました。この作品が高く評価されたのは、田中さんが読んだ加納朋子さんの作品の魅力がその巧妙な構成にあること、そしてその巧みな構成に引き込まれて田中さんが夢中になって読書したことが、読み手にも十分に納得できるように語られている点にあると思います。「読み始めた頃は、全体が大きなミステリーになっているとは知らず、ただ淡々と読んでいたのが、中盤以降はページをめくる手がとまらなくなった。読み終えたときには、爽快感と切なさのようなものが感じられた」などという所など、読んだ作品の魅力を本当によく伝えていていると思います。

優秀作となった作品中、最も高い評価を得たのは2 S・木崎隆太君の作品で、最優秀作とは僅か1ポイント差の14ポイントでした。小さい頃からあこがれていた電車の運転士、その日常と様々な体験について書かれた本を、木崎君が、自らの将来の職業として考えている立場で読んでいる所が、本の選択をも含めて、よかったですと感じます。「暗闇の中に二本のレールが前照灯に照らされて浮かび上がり、信号や対向列車の光が前方から現れては、後方へ流れていく……僕は、こんな非日常的な風景が好きだった」というレトリックなど、かなりな表現力がなければ書けないものです。

次に、2 S・井戸君の作品については、ドストエフスキーの大作に敢然とチャレンジしたことを何より高く評価したいと思います。ただ相手が相手だけに、大作家の魂に肉薄しているとはまでは言えないようですが、それはある意味当然と言えるでしょう。勢田も、最初に『罪と罰』をようやく読了したのは、井戸君と同じ17歳、高校2年の時でした。当時、航空関係の技術者志望だった勢田は、その後、文学の世界にはまって、結局国語の教師になりました。井戸君に同じような道を進んでほしいとは決して思いませんが、十年後でも二十年後でも、その気になることがあったら、もう一度ドストエフスキーの作品を是非読んでみて下さい。その時17歳の時には感じられなかったドストエフスキーの「凄さ」に、きっと気づくはずです。また、そのような読み方ができるからこそ、ドストエフスキーの作品は、人間の魂の深奥を描いた永遠の傑作として読み継がれてきたのです。

もう一つ、1 S・池田篤史君の作品を取り上げたいと思います。池田君が余り読書するタイプではないらしいことは、文章から自然に感じられます。ただ、本の内容の紹介など最小限にとどめ、ただひたすらその本と係わりのある自分の体験を書き連ねていくことによって、とても読んで面白い感想文に仕上がっています。その点で、「読書感想文は苦手」と感じている人にとって、こんな書き方もあるのかと、よい参考になると思います。

もうスペースが少なくなりました。2 E・瀧頭さん、2 C・松岡君、1 M・遠嶋君、1 I・山口君、ごめんなさい。本当は、君たちの作品に対するコメントもしなければならないのだけれど、もうできなくなりました。けれど、君たちの作品もまた、奈良高専の学生の国語力・作文力の水準の高さを示すものであることは、君たちが書いている文章自体が、何よりよく物語ってくれていると思います。勢田は君たちの作品を誇りに思います。立派な作品をありがとう。入選おめでとう。個人的に尋ねに来てくれたら、いつでも勢田の感想は言いますよ。

(国語科・勢田)



受賞された皆さん（校長室にて）

読書感想文入賞作品

『レインレイン・ボウ』
加納朋子 著

『レインレイン・ボウ』を読んで

1C 田中 利奈

私は加納朋子さんの「レインレイン・ボウ」を読んだ。高校のソフトボール部のチームメイトだった知寿子の通夜で、ソフトボール部の面々が再会するところから物語は始まる。高校を卒業してから七年が経ち、それぞれが編集者、看護師、栄養士、保育士、主婦、無職、会社員とさまざまな現在を生きている。そんな彼女達の心情が鮮やかに描かれている。

この本を読んで、一番感じたのが、悩みやトラブルにもめげずに前向きにしっかりと生きていこうという意志の強さである。六編目の「雨上がりの藍の色」で栄養士となった由美子が、職場である社員食堂を少しずつながらも変えていこうと奮闘していく姿には共感を覚えた。初めはベテラン調理師三人組となかなか折りが合わずに苦勞していたのが、最後には見違えるように打ち解けていて、信頼が生まれる。由美子がしたことは、明るく相手に接し、自分のやるべきことをやる。自分から行動していくことの大切さが分かったように思う。

そして、作者が加納朋子さんだということを忘れてはならない。各編それぞれが日常生活の謎を解くミステリーになっているのである。そこからは、人間の心の闇の部分が生々しく感じられた。この物語は七編で構成されていて、一編ごとに一人のソフトボール部員の現在が描かれている。しかし、ソフトボール部員は九人いたのでこれでは二人足りない。ここは私が最も読んでいて、おもしろいと思った部分であり、作者はどうしてこんなにも巧みに描けるのだろうかという疑問に思った部分でもある。二人のうち、一人は病気でなくなってしまった知寿子。もう一人は知寿子と一番親しかった親友の里穂だ。知寿子の死と共に消息が分からなくなってしまった里穂は登場してくることはなかった。でも、里穂の存在が一編一編を一つの物語として繋いでいて、最後の最後までハラハラドキドキさせられた。読み始めた頃は、全体が大きなミステリーになっているとは知らず、ただ淡々と読んでいたのが、中盤以降はページをめくる手が止まらなくなった。読み終えたときには、爽快感と切なさのようなものが感じられた。

『レインレイン・ボウ』の各編には可愛らしいタイトルが付けられている。「サマー・オレンジ・ピール」、「スカーレット・ルージュ」、「ひよこ色の天使」、「緑の森の夜鳴き鳥」、「紫の雲路」、「雨上がりの藍の色」、「青い空と小鳥」の七つである。すべてに色の名前が入っていて、しかも虹に含まれている色だ。各編の情景にぴったりだなと思う。虹は七色のうち、どれが欠けても決して美しいとは言えない。七色で初めて虹として認識されるのだと思う。それは、ソフトボール部のことを暗に示しているように思えてならない。一人の力ではどうにもならないこともみんなが集まればできると言っている気がするのだ。強い絆、友情に溢れた色鮮やかな作品だった。私も将来、このような友人達に出会えたらいいと思わせられた。

『夜のピクニック』
恩田陸 著

ただ、夜歩くだけの素晴らしさ

『夜のピクニック』を読んで

2E 瀧頭 いづみ

北高の恒例行事、歩行祭。24時間かけて、千二百名の全校生徒が、ただ歩く、歩く、歩く。

ただそれだけなのだが、今年の歩行祭は主人公、甲田貴子にとっては、特別な想いがあるのだ。同じクラスの西脇融と歩行祭の間に話をする、異母きょうだいである自分達の境遇についての話をするという、小さな賭けをしたのだ。

貴子の母親は、融の父親と以前、不倫関係にあり、貴子の父親は融の父親でもある。貴子の母親はやり手の経営者でサバサバした性格。娘も貴子にも出産の事情を話してある。一方、融の方は父親の死後、母の実家の援助を受けて暮らしている。不倫相手の方が、颯爽と生きていて、自分達の方が日陰者のようにこそこそしていると、融は苦々しく思ってきた。

よりによって、その二人が高校3年で同じクラスになってしまう。お互いに相手を完全無視していると、皮肉なことに、「二人は付き合っている、あやしい」と噂になる始末だ。融にとっては、貴子親子が自分達の家庭を壊した元凶なのだ。頭の中では、貴子自身に罪はないとわかっているのだが……。

貴子は親友の美和子と、融は忍と歩く。深夜に数時間の仮眠をとっただけで歩き続ける。この小説は、貴子や融各々の想いが交互に、歩行祭の時間軸にそって述べられている。まだ、元気なうちは他人の思惑を意識しているが、体が疲れていくにつれ、頭もボーっとしてきて不必要な鎧がとれ、心が無防備に、むき出しになっていく。そんな時、アメリカに行った親友、杏奈の弟が歩行祭にやってきて、二人が異母兄弟であることを、友人達の前で公言してしまう。

爆弾発言だった。だが、二人ともどこかで肩の荷を下ろしたように感じていた。

疲れきった歩行祭だからこそ、心がむき出しになった今だからこそ、二人は初めて普通の同級生のように話し、わかまわりもなく素直に異母兄弟と認め合うことが出来る。

でも、これは小説の世界だ。現実問題ならばどうだろう。

もし美和子だったら、それとも貴子だったら、当事者としての自分自身は想像もつかない。

この北高の生徒は皆大人だと思う。しっかりしてるし、冷静、お利口さんばかり。出来すぎていて、ドラマみたいである。

でも、歩行祭の途中にある、小さなエピソードは、自然で共感できるものばかりだった。草もちを食べたり、満天の星空を眺めたり。何度となく、私自身も彼らと一緒に歩いているような気がした。

歩行祭は、作者の母校の行事だそう。この小説の本当の主人公は、歩行祭なのかもしれない。貴子と融のややこしい話は、あくまでも小説をおもしろくするためのスパイス。ダラダラ歩いたり、順位を争って走ったり、普段は敬遠していたクラスメートの意外な面を発見したり、息も絶え絶えに体育館に倒れこんだり、それこそが、作者が書きたかったことではないだろうか。この小説は、歩行祭へのオマージュである。

みんなで夜歩く。ただそれだけのことが、どうしてこんなに特別なんだろう。



『罪と罰』

ドストエフスキー 著

犯した「罪」と下された「罰」

2S 井戸 悠太

主人公はラスコーリニコフ。学費が払えないので大学をやめ、ある思想に基づく計画を立てていた。彼が大学にいた頃、ある論文を書いていた。その内容はこういったものである。「人間は大きく分けて凡人と非凡人に分けられる。凡人はただの一般人、非凡人はナポレオンなど、凡人のために今ある秩序を踏み越え新たな秩序を構築する権利があり、その目的を達成するためにはどんな罪も許される」というものだった。本の中では「ありふれた考え」と書いてあったが、確かにそうである。戦争が起こるのはそういう考えがあるからであると思う。おそらく革命家などの頭の中はそうである。ラスコーリニコフはこの論の中で、自分は非凡人であると思える事件を起こす。

彼の中では「しらみ」同然の老婆の殺害を計画していた彼は、彼女が一人である時を狙い計画を実行するが、不意に彼女の妹に現場を見られてしまい、その妹も殺してしまった。思いがけない第二の犯行で、彼は罪の意識に頭を抱え病気になる。人生何が起こるか分からない。確かに彼はほぼ完全犯罪をやりとげた。物的証拠は何もない。ただ、彼は独り言を言う癖があり、自尊心が強く逆上しやすい弱点があった。ふとした事で容疑がかり、警察に目をつけられた。このあたりは読んでいてかなりしんどかった。彼はほぼ狂人と化し、読んでいるこっちも狂うかと思った。人間として生きているうえで一番やってはいけないことは殺人であると思う。だからこの時の彼には同情できない。しかし彼は心優しい、人を愛せる人である。

彼はソーニャという娘に出会った。彼女は熱心なキリスト信者で彼を愛した。彼女はラスコーリニコフに自首を勧めた。そして彼が監獄に入ってから毎日のように会いに行った。彼は最初相手にしなかったが、彼女が病気で三日来なかつただけで、彼はえらく寂しがった。彼は監獄に入った当初、冷静になり、自分がなぜこんなところにいるのか分からなかったが、徐々にソーニャを愛するようになり、新しい生活を夢見始めた。ここで物語は終わっている。

ラスコーリニコフは自分の書いた論文を信じて犯行を行った。しかしそれは、本の解説にも書いてあったが、理性のみであった。ナポレオンの革命とは少し違う。彼の意見は正しいかもしれない。ただ、世界の理論はその論文だ

けでは決定できないと思う。世界には凡人、非凡人はいるかもしれないが、その差は生活してきた環境であると思う。僕はある本で人は脳を完璧に使っていない、そして脳はすべて同じような造りだと知った。この環境とは、生まれた場所、時、家族など結びつきで、その親をそう育てた環境も関係している。非凡人とは凡人の中から生まれる。実際、脳の半分も使わずに生きている現代人に混じって北京原人の赤ちゃんを育てても、同じように生きるだろう。ラスコーニコフの意見は正しいのかもしれない。確かに彼は非凡人かもしれない。しかし彼は自分の論文を過信しすぎた。ナポレオンと違い、理性のみで突っ走った。本能を無視した。別にナポレオンに賛同するわけではないが、彼の行為は人々に受け入れられなかった。英雄にはなれなかったのだ。

犯罪にしても戦争にしても、殺人は道徳心に反する。人は一人では生きられない。殺された人は残された人々に何も言えない。遺族は何も伝えられない。殺人者はその人の代わりにはなれない。ラスコーニコフは自殺さえ考えた。人を殺して人生から逃げることは一番いけないことである。殺人者は殺した人のために生きなければならない。残された時を全て使ってその罪を償わなければいけない。天国、地獄があるかは知らない。それがその人に対する罰である。

『運転士』
藤原智美 著

『運転士』を読んで

2S 木崎 隆太

僕は、『運転士』という本を読んだ。この本は、「運転士」の日々の乗務生活と、その中で起こるさまざまな体験について書かれている。

僕は、将来、電車の運転士になりたいと思っている。この思いは僕が小さかった頃からずっと持ち続けている。僕が小さかった頃は、地下鉄の沿線に住んでいたのので、ときどき地下鉄に乗る機会があった。そのときには、決まって親に先頭車両に乗るようせがんでいたという。地下鉄に乗って前を見ていると、暗闇の中に二本のレールが前照灯に照らされて浮かび上がり、信号や対向列車の光が前方から現れては後方へ流れていくという、きわめて単調だが日常ではあまり体験することのない世界が目の前に展開される。僕は、こんな非日常的な風景が好きだった。同時に、定時運行を続ける運転士の規律のある姿は、僕の大きなあこがれだった。それは、僕が「理論的

に納得できなければ、物事を受け入れることができない」という性格を持っているからなのだろう。僕は鉄道を趣味としているが、このためか、僕は「日本の」鉄道以外にはほとんど興味はない。敢えて「日本の」と書いたのは、外国の鉄道は時刻表があまりあてにならないからだ。この本の主人公である「運転士」の言葉を借りるとすれば、「曖昧さは不自由と同じだった」、「仕事のすべてが、時刻によってきちんと設計されるその仕組みは、ほとんど理想とも言えた」、「空や海は軌道の定まらないあやふやな空間で、ともに天候に左右されやすいということが問題だった」といったことが、僕の運転士になりたいという気持ちを端的に表現している。

この本を手にとって読んでみたとき、僕自身が「運転士」と重なった。「運転士」の姿は、僕が思い描いていた将来像と驚くほどぴったりだったのだ。

よく、鉄道車両の運転で最も難しいのはブレーキ操作だといわれる。そのとき、「運転士」の頭の中で、きまってるい大きな風船が床に落ちて跳ねるのだ。「運転士」は、「ブレーキのショックは風船が床に落ちて跳ね返るくらい滑らかなものでなければパーフェクトとはいえない」という確固たる考えを持っている。文中ではこれだけの文章で表現されているが、実際にはそうたやすいものでたないという。電車通学している人は、このことを想像するのはそれほど難しいことではないと思う。乗客にしてみれば、列車の発進、停止は「当たり前」のことだと思っている人が大多数だろう。しかし、よくよく考えてみると、列車の運転士は停車という多大な集中力を必要とする作業を一日に何度となく行っている。この苦労は、「すごい」の一言で言い表すことはできない。

「運転士」は、一度だけ停止位置をオーバーランしてしまう。そのとき、「運転士」は、前の駅で考え事をしていせいで、頭の中にいつもの風船が出てくることはなかった。僕は、わずかな気の緩みがミスにつながることをしっかり頭に入れておかなければならないと思うと同時に、運転士という仕事は、どんなときにも高い集中力を必要とすることを強く感じた。

実際、この本を読むときまでは集中力の必要性についてそれほど深く考えてみたことはなかったの、運転士という仕事を考えるいい機会になったと思う。そして、僕自身が大人になったら、彼に「運転士になったよ」と胸を張って言えるような運転士でありたい。

『明日の記憶』
荻原浩 著

『明日の記憶』

2C 松岡 直人

記憶というのは僕たちに密接に関わっている。記憶なしではあらゆる行動ができない。テスト勉強、人の顔を覚える、経験するなどあらゆることを人間は記憶する。学生は新たに情報を脳にインプットするわけであるから記憶ということに関して一番活発な時期であるかもしれない。その記憶だが、「明日の記憶」というタイトルの本を見つけ興味を持ち読んでみた。

この本のあらすじは佐伯雅行というもうすぐ50歳という人が突然、物忘れが激しくなっていく病院で若年性アルツハイマー病だと発覚する。今まで、娘が結婚して子供も授かり順風満帆であったことから衝撃的な宣告であったといえる。その事実を受け止めたくなかった。主人公の父親もアルツハイマー病で命を失っていることから自分にも記憶を失っていく恐怖が人一倍強かったのかもしれない。病気が分かった後はあらゆることをメモしていたが、仕事にも支障が出てきて、妻ともうまくいけなくなったりする。そして退職し、アルツハイマー病と闘いながらも記憶を失っていく話である。作中に日記のようなことを書くのだが段々漢字も書けなくなる描写もあった。また、見えないはずの人が見えるいわゆる幻覚なども見え始めるようになる。これが記憶を失っていく過程である。

もし自分が記憶を失ってしまったらどうなるのだろうか。失うことが怖くなってしまい自分の世界に逃げて、そして社会から逃げ出してしまうかもしれない。全てに絶望して生きる気力が失ってしまうかもしれない。今僕は学生の身分であるから勉強をしているが、記憶ができないからついていけない。それにより皆に置いていかれることに苛立ちや怒りを感じてしまうかもしれない。そして大切な人々を忘れるのが怖い。僕にはこれらのことが考えられる。この作品においても、主人公は妻や娘を忘れてしまうのではないかとものすごく憂いを感じていた。そしてこの作品の終盤において自分に娘がいることを忘れてたり、最後の場面にはあたかも初対面であるかのように妻の名前を聞いたりしていた。この場面を読んだときはなんとも言えない気分になった。

でも主人公はずっと悲観的ではなかった。次の言葉がとても印象深い。「記憶はじぶんだけのものじゃない。人と分かち合ったり、確かめ合ったりするものでもあり、生きていく上での大切な約束事でもある。」この言葉は記憶

を失っていく過程にあったものである。僕が記憶を失ったときの仮定において考えたときにこの言葉を読んだとき何か心強かった。僕は今まで記憶は自分だけのモノであると思ってきた。だがこの言葉は記憶というモノは人と共有するモノだと表現している。自分が打ち砕かれたような感じになった。人との触れ合いの中で共通の記憶はいつか思い出になることもある。記憶と記憶が交じり合わなければ人はコミュニケーションができない。考えれば分かることであるが今まで無意識に思っていた。あまりにも自分がエゴイストであったかと思うとすこし恥ずかしい思いであった。

僕は記憶があることがこんなにもありがたく思ったことはなかった。今の僕にはまだまだ記憶することが山ほどあるに違いない。それにたくさん覚えることが苦痛になるときが来るかもしれない。だがそのときはこの本を読んだ時のことを思い出し、未来にプラスになるように頑張っていこうと思う。そして明日に記憶があることに幸せを感じたい。

『風林火山』
井上靖 著

『風林火山』

1M 遠嶋 綸

「風林火山」という本は歴史上の人物を書いた「堅苦しい本だろうな」と思っていました。そう思っていたのに、どうして読んでみる気になったかという「風林火山」は、戦国時代の軍師を中心とした物語だと知ったからです。私は、諸葛亮孔明が好きだったので軍師というのに惹きつけられて読みました。戦国時代の物語ということもあって、初めて見る漢字や言葉に戸惑ったり意味が分からなかったりしたが、だんだんとページを進めていくうちに少しずつ慣れてきました。

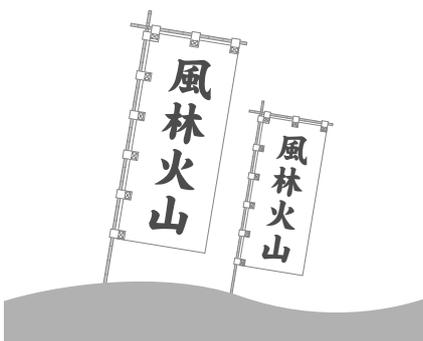
最初は、主人公の山本勘助の事を剣術もたいしたものがないし、知識だけで知っているにもかかわらず、諸国遍歴の経験があると偽っていました。自己顕示欲の強いだけの浪人と思いました。しかし、読んでいくうちに、活字で書かれているにもかかわらず次第に山本勘助という人物の物凄い形相が頭の中に浮かんできました。それだけでなく自分自身がその物語の中において、私が戦国時代の戦場や軍議にいるような気がしてきました。勘助は子供の頃から身体の障害により風貌が非常に醜かった事により誰からも受け入れてもらえなかったに違い

ないと思いました。にもかかわらず勘助は、自分よりも随分若い武田の武將に惹かれ、彼の為に勘助が学び得た知識を惜しむことなく与え、忠誠を尽くしたのはどうしてだろうかと考えました。武田信玄がそれほどにすばらしい武將だったのだろうか。勘助を初めて受け入れてくれた人物だからだろうか。

軍師として武田信玄に仕えてから、戦は血を流して勝利を得るよりも、孫子の兵法から学んだ策略で血を流さずに勝利を治めるといった所がおもしろいです。「孫子の兵法」と言う本も読んでみたくなりました。

後に、由布姫と云う気位の高い、聡明で、美しい女性を結びつけこの二人を守り、支え続けていこうとしたのは、なぜだろう。軍師としての山本勘助であれば、この由布姫の命をとくに奪っていたら。私は、信玄と由布姫に勘助の夢を生きながら託したのではないかと思いました。勘助には持っていない武將としての器量。勘助には得られなかった美しく聡明な伴侶。心からこの二人を支えていくことが彼の生き甲斐となっていたのだろうと思います。そして、この二人の間に生まれた四郎を武田家を継ぐように、いろいろと画策していくのもやはり勘助の生き甲斐の一つとなっていました。最後には、由布姫が年老いた勘助よりも早くにこの世を去ってしまった事を知った時の哀しみが伝わってきました。また、戦場に出向く前に由布姫の墓前に話しかけている姿もどれだけ由布姫を愛しく想っているのかがわかりました。その由布姫の息子をあたかも自分の孫のように慈しんでいる心が温かく感じました。勘助の策の失敗により、武田信玄を危険にさらしてしまいました。それを命がけで助けようとしている信玄の息子をかばい最期は、若い武士に首をはねられる勘助は、死の恐れよりも死を受け入れる境地に至っていた気がします。

現在、私が生きている時代は、自分の生き方がわからなくなってしまう人がたくさんいると思います。勘助のように自分の行き方をしっかり貫き通すのは難しいけれど、私も、しっかり見つめて自分の人生を真っ当したいと考えます。



『チビだった僕デカかったプロ野球の夢』
浜中祥和 著

『チビだった僕デカかったプロ野球の夢』

1 S 池田 篤史

この本は、著者の浜中祥和さんの野球人生を書いた本です。初めてこの本を手にしたのは中学二年の夏で、この作者の事など全く知りませんでした。何故僕がこの本を読んだのかと言うと中学校の野球部の顧問の先生が、知り合いの方から頂いたのをそのまま僕にくれたのです。野球部には他にも何十人もいるのに、本を買ったのは何故か僕一人だけでした。勿論最初は「なんで自分だけ」と思っていました。今になって考えると、先生が何故僕にくれたのか分かるような気がします。

浜中祥和さんがプロ野球選手だった当時、浜中さんの身長は160cmをわずかに超える程の「チビ」でした。プロ野球で170cmといったらかなり背が小さい方なので160cm台など数えるほどしかいません。浜中さんは「チビ」でありながら幼少のころから体が弱く、部活動でもできる部活が限られていました。僕は身長が低く今でも160cm程度です。それでも、同じ年での浜中さんと比較すれば僕の方が高い程身長が低かったのです。

浜中さんは小学生の時、セカンドからファーストまでの距離を投げられなかったそうです。およそ十数メートルの距離です。さすがの僕でもそれくらいは投げられます。しかし浜中さんの「なめられてたまるか」と、持ち前の負けん気で人一倍の練習をこなし、メキメキと上達していきます。それに引き替え自分は「チビヤから仕方ない」と、マイナスな考え方で練習していました。練習もおろそかになっていた時、自分にとってこの本は衝撃でした。「同じチビでもこんなに違うんや」

この本を読んでからすぐに練習試合がありました。先生に代打を告げられ、いつものように打席に入りました。すると、相手チームの外野手が異常なまでの前進守備。バカにされているような気持ちです。

一球目、ファウル

二球目、ファウル

三球目、打った打球は足に当たりフェアゾーンへ。勿論自打球でファウルです。しかしそのままファーストに送球され、アウトを宣告されました。誤審です。仕方なくベンチへ引き返してきた僕に先生が一喝しました。「審判にアピールしたのか」「しました」「聞こえなかったぞ」

何故こんなに違うのか。相手チームに心を見透かされていたような気持ちです。ショックでした。しかし選択は

一つ。「見返したる」

もう一度対戦するかどうか分からない学校相手に必死に練習しました。そして、その気持ちが届いたのか二ヶ月後またあの学校との練習試合の日がやってきました。前回と同じように代打に出されました。またあの前進守備です。初球から打ちました。打球は前進守備の外野の頭上を越えていきました。

この本に出会えていなかったらあのまま腐っていたいたかもしれません。もしそうであればこの高専の野球部に入っていたかどうかさえ分かりません。大袈裟ですが、それほどこの本が僕に与えたものは大きいということです。

『泣き虫しよったんの奇跡』
瀬川晶司 著

『泣き虫しよったんの奇跡』を読んで 11 山口 浩基

僕がこの本を手にとった理由は、この本が将棋を題材にしている、小学生の頃から将棋をしている僕の興味を引いたからです。今ではもうほとんど将棋をすることはありませんが、昔熱中したせいか、将棋に対する思いは何一つ変わっていません。

この本を執筆された瀬川晶司さんも、僕と同じように小学生のときに将棋と出会いました。将棋に熱中したのも、将棋がきっかけでクラスの中で少しだけ目立つ存在になれたのも、僕自身同じような体験をしたことがあるのでとても共感できました。

でも、僕と瀬川さんには一つの決定的な違いがありました。それはプロ棋士を目指すほどに将棋に熱意を注げたかどうかの違いです。いくら将棋が好きだといっても、僕は自分の限界は分かっていたつもりでしたし、将棋を仕事にするだなんて考えもしませんでした。そんな僕とは違って、瀬川さんは、若手を育成しいずれはプロ棋士にするために創られた奨励会に入会したのです。

この奨励会にはプロ棋士が増えすぎないための措置として「産児制限」というものがあります。その内容は二十一歳の誕生日までに初段、二十六歳までにプロ棋士の証である四段を取らなければ、強制的に退会させられるといったものです。しかも奨励会に入れば人並みに進学して就職、といったことは許されず、全ての時間を将棋の勉強に当てなければなりません。

奨励会に入会を果たした後、瀬川さんはプロ棋士になるために勉強を続けました。しかし、その努力が報われ

ることはありませんでした。結局三段のまま二十六歳の誕生日を迎えてしまった瀬川さんは、奨励会を退会することになりました。退会が決まった日、瀬川さんは

「生きていてもしかたがない」

と思ったそうです。僕にはそのときの瀬川さんの気持ちを理解することはできませんが、今まで積み上げてきたものがゼロになるというのは、相当辛いものだったのではないかと思います。

しかし、それでも瀬川さんは将棋をやめませんでした。大学に通い、就職してからもアマチュアの人達と将棋の研究を続け、アマの大会に出場して優勝するようになりました。そしてついにはアマとしてのプロ棋士との対戦を果たし、プロに対して七割以上という驚異的な勝率を上げるまでになったのです。

当然、アマ強豪の仲間達からはプロになったらどうだと言われ、瀬川さんはどうすべきか悩みました。もし瀬川さんがプロになりたいと日本将棋連盟に嘆願すれば、奨励会員や三段リーグ落ちした人からの非難は確実です。

でも瀬川さんは、自分一人の我儘ではなく、様々な事情によってプロになれなかった人々にもチャンスが与えられるべきだと考えました。その足がかりをつくるためにも、瀬川さんは日本将棋連盟に対して嘆願書を提出しました。

そして平成十七年十一月六日、瀬川さんは六十一年ぶりに行われたプロ編入試験に、プレッシャーに苦しみながらも合格しました。その後、作中で瀬川さんはこう語っています。

「好きな道を進むのは大変だったよ。でもがんばってみて本当に良かった」と。

僕がこの本を読み終わって感じたことは、たとえ何かに向かって進んでいるときに投げ出したくなっても、挫折しそうになっても、あきらめてはいけないということです。瀬川さんの生き様は、まさにそれを証明していると思いました。



学生会図書委員による ブックガイド

岩波新書で気軽に読書

5S 谷宗一郎

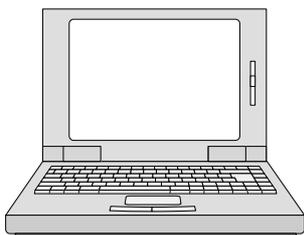
図書館では毎月多くの本を購入し、蔵書を増やしていっています。その購入している本の中の多くを占めているものの中に、岩波新書があります。政治、経済、文学、歴史、芸術、工学などなど、岩波新書には様々なジャンルの本が揃っています。基本的に、一冊あたり200ページ程度なので読むのが遅い人でも、貸出期間の2週間が有れば十分に読み切れるかと思えます。もっとも、ページ数がたいしたことがないからといって、内容もたいしたことがないということはありません。各々の本の著者は、それぞれの分野に精通しているしている方々がです。新着図書の棚や、一回の文庫本の海外の著者の棚の裏にある新書の棚をざっと見て、興味を引かれるタイトルがあれば、ぜひ手にとってもらいたいです。何か一冊くらいは興味を引かれる本があると思えます。

岩波新書の中から私のお勧めする本をいくつか紹介したいと思います。まずは「インターネット」「インターネットⅡ—次世代への扉—」（ともに村井純 著）を紹介します。著者は黎明期のインターネットを支えてきた方です。1995年/1998年刊と少々古いですが、インターネットを成り立ちから知るには良い本です。

もう一つ「日本語の歴史」（山口仲美 著）を紹介합니다。これは日本語を漢字が伝わった頃まで掘り下げ、時代の下っていくのに伴って変遷する言葉をそれぞれ細かく解説しています。

最後には、明治の話し言葉と書き言葉に同じ言葉を使うようにしようという言文一致運動を取り扱っています。日本語を知ること、言葉をうまく使うための礎になるかもしれませんので、読んでおきたい本であると思えます。

さて、最後に繰り返しになりますが、タイトルを軽く流し見するだけでも興味を引かれる本があると思えますので、ぜひ一度ご覧下さい。



「本を読むという事」

4S 田中 省吾

今現在、「読書の季節」なんていうおおっぴらな時期ではありませんが、この文章に目を留めた方がいるならば、すこし伝えたい。いろいろな形の“読書”があるということをと、いいますのも、最近になって、僕自身そういうことをなんとなく実感したからなんです。具体的に言いますと、まず、正統派、ハードカバーの分厚い本。次に、趣味本、いわゆるスポーツの上達本とかです。そして、雑学本、を、同時進行で読むということが、いかんせん楽しいと思えたのです。僕自身、そう読書家なわけでもないのですが、こういう読み方はアリだと思います。いろんなジャンルの本を同時期に読み進める事。なぜ、そんな事をおすすめするのかというと、日常生活する上で、いろんなシーンがあり、そして、いろんな休憩時間がありますよね。日によっても、時間によっても違うその休憩時間を読書にいそむるとき、なんとなく、気分があわないこともしばしばあったりしませんか？僕はあります。そして、そんな時、複数のジャンルの本を持っていると、そのときの気分に合わせる事ができるわけなのです。また、読書は、当たり外れが多くてその分解能が非常に高い物だと思います。だから、複数の本に同時に手をつけられるようにできれば、自分の好きな本を見つけやすくなるのではないのでしょうか。

さて、最近の僕の趣味にかぶってしまうのですが、すこし、お勧めしたい本を紹介したいと思います。まず、宮部みゆき『レベル7』。この本は、ゆっくり読んでます。寝る前に少しずつ。サスペンスみたいです。だんだん浮き彫りになる真実がとても、おいしくかかれています。

次に、『ロードバイクバイブル』。著者のエンゾ早川さんのかっこよさと、注釈の面白さが僕はつぼにはまりました。また、このジャンルのこういう読みやすい読み物系はあまり見ない気がします。

最後に、『雑学知ってるようで知らない知識』。雑学本はそうなのですが、一つの項目の文章量が少ないです。だから、ちょっとした休憩時間なんかにはちょっと読むなんて事もできるわけなのです。また、本自体のサイズもポケットにすっぽり入るサイズで、持ち運びにも支障がないという最近のおきにりの一つです。

以上がお勧めしたい本でした。

ちなみに、上で上げた三冊は全て奈良高専の図書館にあります。よければ、借りて見てください。

新しい本「ライトノベル」とは

4C 水谷 祐介

皆さんはどんな本を読んだことがあるでしょうか？

ミステリーや恋愛物といった、ジャンルのことではありません。一般書、文芸書、専門書、実用書、伝記、雑誌、…etcのような、本の種類のことです。

高専生の皆さんがよく読まれるのは専門書だと思いますが、今回は比較的新しく登場した『ライトノベル』について紹介させていただきます。

ライトノベルを一言で表すとすると、『漫画／活字バージョン』です。他の小説などが、「いかに現実っぽく書くか」が重要であるのに対して、ライトノベルは、「いかにそれっぽく書けるか」なのです。現実にはありえるかどうかなんて、どうでもいい。大切なのは、読者に受け入れて貰えるキャラクターを格好良く書いていくこと。読者が納得して楽しめるのならそれでいい、という読者本意な本なのです。ですから、こんなヤツ現実にはいねーよ、なキャラクターが出てきたりすることもしばしばです。人によっては、この時点で「現実味がない」と意ってNGを出す人もいます。しかし、映画やドラマにもそう言う登場人物はいます。「これは漫画なんだ」という、軽いノリで読みましょう。

ただ、まだまだ開発され尽くしていない分野でもあるため、当たり外れが大きいという難点があります。「極上」な作品に出会ったかと思えば、「金返せ」な作品を買ってしまった、しかし、ある程度の指標さえあれば、手軽に活字を楽しむ手段として大変有効です。

行数もなくなってしまったので、私見でオススメをさせていただきます。明確なジャンル分けが難しいため、ジャンル分けはしていません。

『キノの旅』、『狼と香辛料』、『9S』、『伝説の勇者の伝説』、『文学少女』、…etc。この中には、図書館に置かれているものもありますので、是非一度読んでみて下さい。

それでは、良い本との出会いを。

非日常系ストーリー

3E 伊藤 祐基

あなたは普段の平凡な日常と非日常的な日々とどちで幸せと感じられることがあると思いますか？

非現実的な世界はファンタジー系の小説などによくある設定です。非現実的といってもいろいろありますが、魔法が使えるようなものが多いような気がします。ほかには、精霊や死神、天使、宇宙人など空想上の人物、生き物(?)にあうようなものや、突然時間、空間移動するなどFS的なものも非現実的な日常と感ずるかもしれません。大半は、非日常的な世界からすぐには抜け出せない設定です。もし平凡な日々と非現実的な日々、選べたらあなただったらどちらが好きですか？どちらを選びますか？

今回紹介する本は、角川文庫より発売されている滝本竜彦氏の「ネガティブハッピー・チェーンソーエッチ」です。あとがきなどを含めて300ページほどです。

内容は、不死身チェーンソーを持った男とナイフを投げる女子高生が戦っているのを主人公(?)の男子高校生、山本陽介が目撃したところから始まります。このときに陽介は普段の生活では体験できないようなことを体験しました。次の日、陽介は平凡な人生か、怖いがチェーンソー男と戦う野に加えてもらうかを一応悩みます。出した答えはもちろん… この先は実際に読んでみてください。

ネガティブハッピー・チェーンソーエッチはわりと読みやすいと思いますが、文字だけはいやだという人はライトノベルと呼ばれるのはどうでしょうか。はっきりとした定義はないようですが、こちらは挿絵がいくつか入っているのだから読みやすいと思います。

で、ライトノベルから似たような内容のものを1冊紹介しておきます。

谷川流氏の「涼宮ハルヒの憂鬱」です。去年の7月7日に新聞で全面広告を出していたので見たことある人いるのでは。

この本は角川文庫が2007年の「発見。夏の百冊」で紹介されています。これ以外にも時をかける少女、ブレイブストーリー、ダ・ヴィンチ・コードなども載っていました。今年も夏の百冊をやると思いますので1度見てみてはどうですか？

編集後記

学生の皆さん読書感想文ありがとうございました。若々しい感性で表現され素晴らしいです。

読書の感想は読み手によって異なります。それは、作品の情景を想像するのに読者の体験・考え方・情緒等がスパイスを加えるからでしょうか。しかし、そこに映像と違い視覚にイメージを左右されない、活字の面白さがありますね。図書館には多くの本があります。是非利用し、どのような想いを感じるか体験してください。

最後に、寄稿頂きました、先生、学生の皆さんありがとうございました。

(図書館)

奈良工業高等専門学校 図書館

〒 639-1080 大和郡山市矢田町 22

TEL 0743-55-6015

URL <http://www.nara-k.ac.jp/jimu/library/>